

➤ ビクターザウィナー(VICTOR THE WINNER、漢字表記:維巷智能) = 香港

せん 6 歳・黒鹿毛(オーストラリア産・2018 年 9 月 5 日生まれ)

父:Toronado = 母:Noetic(母の父:Cape Cross)

馬主 : ユンラウ・チュウ氏

調教師 : チャップシン・シャム

騎手 : ジョアン・モレイラ

戦績 : 全 17 戦 7 勝、2 着 2 回、3 着 1 回

総獲得賞金: 約 3 億 9,900 万円

主な戦績 : '24 センテナリースプリントカップ(G1) 1 着

'24 高松宮記念(GI) 3 着

'23 ジョッキークラブスプリント(G2) 2 着

'23 シャティンヴァーズ(G3) 2 着

本馬は 3 月の高松宮記念に続く二度目の来日となります。初めての左回り、重馬場となった中京での一戦ではハナを取り、馬場の真ん中に持ち出されて直線に向きます。坂を上るあたりで脚色が鈍り、内を進んだマッドクール、ナムラクレアにかわされてからは差を広げられたものの、後続には 1 馬身半の差をつけて 3 着を確保。騎乗した K.リオン騎手が讃えたように、初の海外遠征で健闘と言える内容でした。

帰国後は 4 月 28 日のチェアマムズスプリントプライズ(シャティン、G1、芝 1,200m)に出走し、現地では 3 番人気、日本での発売では 2 番人気に推されました。雨で悪化した馬場状態は稍重まで回復し、カリフォルニアスパンクルと並ぶようにレースを引っ張りましたが、残り 200m で優勝争いから脱落し、勝ったインビンシブルセージから 6 馬身 3/4 差の 7 着でレースを終えました。

次いで出走した前走のシャティンヴァーズ(G3、芝 1,200m)は、2023/2024 年シーズンの最後のレースで 9 戦目。4 戦連続でリオン騎手が手綱を取り、ここでも先頭でレースを進めました。トップハンデの 61kg が堪えたのか、残り 200m で後退して 6 着でした。勝った軽ハンデのカーインライジング(52kg)からは 4 馬身差で、チェアマムズスプリントプライズ覇者のインビンシブルセージ(8 着)には 2 馬身 1/4 先着しました。

全 17 戦中 15 戦は右回り、16 戦は芝の 1,200m で、持ち時計は 2022 年 11 月の 1 分 8 秒 1(良)。2023/2024 年シーズン終了時点の香港ジョッキークラブによるレーティングではゴールデンシックスティ・ロマンチックウォリアー(133)、ラッキースワイネス(132)、カリフォルニアスパンクル(126)、ヴォイツジバブル(125)に次ぐ 124 の評価となっています。前走後は休養を経て、8 月に従化競馬場のオールウェザーコースで追い切りを 5 本消化してから、芝 1,000m のバリアトライアル(リオン騎手騎乗)に臨み 57 秒 09(4F: 44.0 - 2F: 22.9)のタイムで先頭でフィニッシュ。その後はシャティンで調整され、9 月 3 日には僚馬ロマンチックウォリアーと併せる形で芝で追い切られています(6F: 85.2 - 4F:54.2 - 2F:25.1)。さらに、9 月 9 日にオールウェザーコースで追い切り、12 日には同コースでバリアトライアル(1,200m; リオン騎手騎乗)をこなし、1 分 9 秒 60(4F:45.6 - 2F:23.6)で 1 位入線しています。

ビクターザウィナーはオーストラリアのアダム・サングスター氏の生産馬で、2020 年のメルボルン・プレミア・イヤリング・セールに上場され、香港の代理購買組織ゴールデン・リバー・インベストメント社が 18 万豪ドル(当時約 1,370 万円)で購入し、ユンラウ・チュウ氏の所有馬となりました。

父のトロナード(その父ハイシャパラル)は 2013 年のサセックスステークス、2014 年のクイーンアンステークスとマイル G1 を 2 勝。主な産駒に 2021 年に豪 G1 のウィリアムレイドステークスを

制したマスククルセーダー、2021年ユナイテッドネーションズステークス、2022年マンハッタンステークスとアメリカでG1を2勝したトリブヴァン、今年の香港クラシックマイル、香港クラシックカップ優勝馬ヘリオスエクスプレスなどがいます。母のノーティック(その父ケーブクロス)は現役時1勝。近親にアメリカのカーターハンデキャップなどG1・3勝で、1990年と1991年にエクリプス賞のチャンピオン・スプリンターに輝いたハウスバスター、2004年のG1ブリーダーズカップハンデキャップで2着のクエロクエロのほか、1996年から2000年にかけてJRAで5勝を挙げたヤシマジャパンがいます。

チャップシン・シャム調教師の管理馬として2022年9月にクラス4のハンデ戦(シャティン、芝1,200m)でデビューを迎え、M. プーン騎手とのコンビで幸先よく逃げ切り勝ち。直線では徐々に後続を引き離し、最後は3馬身1/4差をつけて人気に応えました。以降もシャティン競馬場の芝のレースを中心に出走しています。クラスの上がった2戦目(芝1,200m)は先手を奪ったものの最後の100mで脚色が一杯になって5着。J. マクドナルド騎手に鞍上が替わった11月のクラス3ハンデ(芝1,200m)は最後は半馬身差まで詰め寄せられたものの逃げ切って2勝目を挙げましたが、続く同条件の12月のレースは3番手からゴール前で後続に飲み込まれて7着でした。

年が明けて2023年1月のクラス3ハンデ(芝1,200m)を、H. ボウマン騎手の手綱の下、終始主導権を握って4馬身差で完勝すると、続く3月のクラス2ハンデ(芝1,200m)はZ. パートン騎手にスイッチとなりましたが、先行争いから最後まで脚色が鈍らず2馬身半差の快勝。次いで4月のクラス2ハンデ(芝1,200m)もダッシュをつけてハナに立つと、後続の追撃を半馬身振り切って連勝を3に伸ばし、満を持して重賞に駒を進めます。6月のシャティンヴァーズ(G3、芝1,200m)はK. ティータン騎手と初めてコンビを組んで2番人気。ゲートを出て前年の香港スプリント2着馬サイトサクセスとともに馬群を引っ張ると、その背後にいた断然人気のラッキースワイネスに残り100mでかわされたものの、後続には3/4馬身差をつけて2着を確保。上々の内容でデビューシーズンを締めくくりました。

休養を挟み9月のクラス1ハンデ戦(芝1,200m)ではラッキースワイネスとの再戦となりましたが、9キロのハンデ差を利用して同馬の追い込みを2馬身半差抑え、新シーズンの初戦を逃げ切りで飾りました。続く10月のプレミアボウル(G2、芝1,200m)はラッキースワイネスを2番手に従えて逃げますが、直線半ばで手応えが悪くなりしんがりの5着で入線。しかし、翌月のジョッキークラブスプリント(G2、芝1,200m)はゴール手前でラッキースワイネスにかわされたものの、最後まで粘りを見せクビ差2着に健闘。3着でG1・4勝馬のウェリントンには3/4馬身先着しました。それが評価されてか、初のG1の舞台となった香港スプリント(G1、芝1,200m)は3番人気に推されます。ここは8戦ぶりにマクドナルド騎手を鞍上に迎え、日本のジャスパークローネにハナを譲って2番手を追走。これを残り300mでかわして先頭に立ち見せ場を作りましたが、最後の100mでラッキースワイネスら3頭にかわされ、1着から2馬身差の4着でした。

2024年に入り、1月7日にはポヒニアスプリントトロフィー(G3、芝1,000m)で初めて直線のレースに挑み、トップハンデの61キロを背負いながらも1番人気でレースを迎えました。ボウマン騎手を鞍上にいつも通り先頭でレースを進めましたが、初の直線競馬のテンポに戸惑ったのか、残り300mで後退を始めて最後は7着で入線。3週後のセンテナリースプリントカップ(G1、芝1,200m)では13頭立ての7番人気と評価を落としましたが、テン乗りとなったK. リオン騎手の下、レース前半を35秒99というペースで通過。直線に入っても余力十分で、まんまと逃げ切り、初の重賞タイトルがG1となりました。レース後、シャム調教師は勝因として序盤のペースを挙げ、リオン騎手の騎乗を称賛するとともに、ビクターザウィナーに日本行きのプランがあることを明かし、その言葉のとおり高松宮記念で来日が実現しました。

◇ 馬主:ユンラウ・チュウ氏(Chu Yun Lau / 漢字表記:朱潤流)

香港において自身の名義でこれまで4頭を所有し、いずれの馬にも漢字表記でビクトリア・ハーバーを表わす“維港”を冠名に用いており、本馬の馬名「ビクター(VICTOR)」もそれに由来しています。現役馬は本馬の他に、D. ホワイト厩舎所属で今年6月に香港デビューを果たしたアイルランド産の4歳せん馬ビクターザラピッドがいます。また、引退した2頭のうちザランナー(維港奔流)はD. ホワイト、F. ロー、K. ティンの各厩舎を渡り歩き2019/2020年シーズンからの4シーズンで6勝を挙げました。また、香港以外に、マカオでも競走馬を保有していました。

◇ 調教師:チャップシン・シャム(“Danny” Chap Shing Shum / 漢字表記:沈集成)

1960年6月27日生まれの64歳。1977年から1983年までの間、香港で騎手として通算24勝を挙げました。騎手引退後は、先のチャンピオントレーナーであるアイヴァン・アラン厩舎の調教助手として経験を積み、2000年の安田記念を制したフェアリーキングプローンなどの有力馬に携わりました。

2003/2004年シーズンから調教師としてのキャリアをスタートし、初年度から34勝を記録すると、翌シーズンには47勝を上げるとともに、シンティレーションで香港クラシックマイルを制するなど、早くから活躍を見せます。近年は常にリーディングのトップ10を維持し、2020/2021年シーズンはキャリアハイの57勝で5位、2021/2022年は45勝で7位、2022/2023年は50勝で7位。2023/2024年シーズンは482戦52勝の5位で、通算勝利数は800を超えています。

本馬に加えて、これまでの主な管理馬にシンティレーション(2006・2007年センテナリースプリントカップ)、サムズアップ(2009年香港クラシックマイル)、シーズンズブルーム(2018年スチュワーズカップ)などがあります。さらにここ3シーズンはロマンチックウォリアーで香港競馬界を席卷し、2022年に香港クラシックマイル、香港ダービー、クイーンエリザベスII世カップ、香港カップ、2023年にクイーンエリザベスII世カップ、香港カップ、今年に入り香港ゴールドカップ、クイーンエリザベスII世カップなどを制しました。

海外でも同馬が昨年オーストラリアで行われたコックスプレートと本年の安田記念を勝ったほか、2012年にはリトルブリッジがイギリスのキングズスタンドステークスで優勝しています。日本に管理馬を送るのはそのリトルブリッジで参戦した2012年のスプリンターズステークス(10着)が最初で、今年3月の本馬での高松宮記念(3着)、6月のロマンチックウォリアーでの安田記念の優勝に続き、今回が4度目となります。

◇ 騎手:ジョアン・モレイラ(João Moreira)

1983年9月26日生まれ、ブラジル南部パラナ州のクリチバ出身。同国で2000年から騎乗を開始し、サンパウロ地区を中心に1,000勝以上を挙げた後、2009年にシンガポールに移籍すると、翌年から4年連続でリーディングを獲得するとともに、同国のシーズン最多勝記録も次々と塗り替え2012年には206勝まで記録を伸ばしました。2013年10月からは香港に拠点を移し、2014/2015、2015/2016、2016/2017および2020/2021年シーズンにリーディングに輝いたほか、2016/2017年には香港記録となるシーズン170勝を挙げました。

香港での主なG1タイトルは香港マイル(2014年エイブルフレンド)、香港カップ(2014年デザインズオンローム)、香港スプリント(2015年ペニアフォビア、2019年ビートザロック)、香港ヴァーズ(2016年サトノクラウン、2019・2021年グローリーヴェイズ)、クイーンエリザベスII世カップ(2017年ネオリアリズム)、チャンピオンズマイル(2015年エイブルフレンド、2016年モーリ

ス)、チェアマンススプリントプライズ(2019年ビートザクロック)。また、2017年にはラッパードラゴンで史上初の香港4歳シリーズ完全制覇を達成しています。

2022年に母国に拠点を戻してからは世界各国でスポット騎乗する機会が多く、ブラジルでの騎乗数は限定的であるにも関わらず、6月に終了した2023/2024年シーズンはリオデジャネイロ州大賞(モナンファン)、ブラジル大賞(オバタイエ)などのG1タイトルを含む70勝で、ブラジルリーディング8位につけました。これまで拠点とした国・地域以外でも、アラブ首長国連邦で2014年アルクオーツスプリント(アンバースカイ)、ドバイゴールデンシャヒーン(スターリングシティ)、2017年ドバイターフ(ヴィブロス)を制したほか、オーストラリアやウルグアイでもG1勝鞍があります。

日本での初騎乗は2014年の安田記念(グロリアスデイズで6着)。2016年8月には初めて短期免許を取得して騎乗し、史上最多タイとなる騎乗機会7連勝を記録。以降、2017、2018年、昨年、今年と短期免許を取得し、JRAの通算成績は2018年エリザベス女王杯(リスグラシュー)、今年の桜花賞(ステレンボッシュ)など重賞13勝を含む、634戦189勝です。6回目の出場となった今年のワールドオールスタージョッキーズでは2015年に続く2度目の優勝を果たしました。スプリンターズステークスは、2018年のナックビーナス(7着)以来の騎乗となります。